

## Ⅱ 史料館での研究に関わって

## 史料館での研究に関わって

東北大学 大藤 修

私が史料館の助手に就任したのは1975年10月1日である。当時の史料館長であられた鈴木寿先生が、助手を採用したいので東北大学から誰か推薦してくれるよう渡辺信夫先生に依頼され、近世史専攻で修士課程修了、27才未満という条件に合致していたのは私だけであったので、白羽の矢が立ったらしい。

私が史料館に就職した時には、若手の教官は井上勝生氏のみで、他は文部省史料館草創期から勤務されているベテランの方ばかりであった。1年半後の1977年4月には安藤正人氏、その翌年4月には北海道大学に転出された井上氏の後任として笠谷和比古氏が、相次いで助手に就任され、若手教官が3人となった。当時は、1972年5月1日に文部省史料館が新設の国文学研究資料館の付置機関となってからあまり年月がたっていなかったため、歴史学界や史料保存関係者の間では、史料館は国文学研究資料館に身売りしたという批判が依然として強かった。私も安藤・笠谷両氏も史料館の歴史についての知識がなかったので、若手懇談会なるものを結成し、史料館とわが国の史料保存運動の歴史について、関係資料を収集して検討し、また先輩諸氏に話を伺って勉強した。それとともに、史料館の将来構想を若手なりに考えようとした。

1982年6月、行政管理庁より、前年9月の行政監察にもとづき、国文学研究資料館付置の史料館と国立歴史民俗博物館との事業内容の調整をはかり、望ましい研究活動体制を確立するよう勧告を受けた。これにより史料館は、国立歴史民俗博物館に統合されるか、国文学研究資料館に完全吸収されるかの二者択一を迫られることになり、史料館員は歴史系諸学会の意見を聞きながら連日のように会議を重ね、対策を練った。その結果、困難ではあるが、史料館を独立させ、名実ともにアーカイブズとして機構・機能を拡充し、わが国の史料保存利用体制の中で独自の役割を果たす方向で努力することが確認された。それを「史料保存利用体制と国立史料館の役割（中間報告）」としてまとめ、『史料館報』第43号（1985年）に公表している。そのなかで①情報・閲覧サービス機能の充実、②研究機能の拡充、③研修・教育機能の充実をうたい、②で「文書館学」を確立する必要性を提唱し、史料館をその全国的な共同研究センターとして位置付けようとしている。

文書館学という命名には、図書館学、博物館学があるように、文書館にも、その運営と業務遂行の裏付けとなる独自の学問体系がなければならないという考えと、わが国では文書館はいまだ社会的に認知されていなかったのも、その存在の独自性をアピールしようとする意図がこめられていた。のちに史料管理学や記録史料学とも称するようになるが、私自身は、史料管理学は文書館学の一部、記録史料学は史料管理学や歴史学などの基礎をなすものと考え、私の関係論考もそうした位置付けで草している。史料館として文書館学の樹立をうたった以上、私もそれに取り組みざるをえなくなり、自身の実務経験を基に、わが国で史料の調査・整理に携わってこられた方々が提示されてきた知見や、諸外国のアーカイブズ関係の学問にも学びながら、自分なりに史料の調査・整理論をまとめてみた。また、その基礎として記録史料学なるものを確立しなければならないと考え、それを提唱してもいる。私は1993年4月に東北大学文学部に転出したが、史料館での貴重な実務・研究経験を生かした教育をし、史料保存に貢献しうる人

材も育てたいと考え、「資料管理学」という講義を設けて、毎週講義と実習を行なっている。教え子で史料保存機関に就職した者も8人いる。今後、史料館の方々にもお世話になるであろうが、よろしくご指導のほどお願い申し上げる次第である。

## 史料館での研究に関わって

山口県文書館 戸島 昭

このところ10年、国文学研究資料館史料館が「記録史科学」を構築し、「大学院大学」への道を開こうとしている。それも「アーカイブズの科学」という高い目標を掲げての邁進ぶりである。このエネルギーは、一体全体、どこから湧き出てくるのだろうか。

さかのぼってみれば、戦後の混乱が続いていた50年前、歴史史料の緊急避難的な保存利用機関として設立された文部省史料館が、昭和27年（1952）に近世史料取扱講習会を開設し、全国的に歴史史料の保存利用を促したことが出発点であっただろう。以後、毎年の講習会を重ねる中で、史料保存利用理論を用意し、史料館活動を普及する柱にしていた筈である。この講習会などに啓発されて、山口県内でも、翌々昭和29年（1954）には、山口県地方史学会が市町村史編纂関係者研修会を開催し、史料館設立運動を展開しており、その結果として、昭和34年（1959）に山口県文書館が設立された経緯をもっている。

そして現在、とりわけ昭和62年（1987）に専門職員の配置を明記した公文書館法が成立すると、翌々平成元年（1989）には、史料館が専門職員の養成制度を先取りするかたちで、従来の講習会を「史料管理学研修会」と改称し、長期8週間と短期2週間の研修会に拡大・改組し、多彩なカリキュラムを組みながら「史料管理学」を構築していたわけであり、これが現在の「記録史科学」と「大学院大学構想」へ繋がる道程であったのかと、今にして気づいた次第である。

振り返れば、この深い底流と高い目標を理解しないまま、平成3年（1991）春の電話依頼で、「現代行政文書の評価と移管」という長期研修会講師の一端を担ってしまったことから、それ以後の5年間の苦心が始まった。研修会用の理屈と制度を考えるだけでなく、実際上の評価選別移管業務を乖離させないための苦勞が始まったのである。さらにはまた、平成8年（1996）度に、特定研究としての「記録史料の情報資源化と史料管理学の体系化に関する研究」が、「記録史料認識論」・「評価と収集」・「整理と情報化」・「保存と修復」・「文書館と専門職」という5部会構成で発足したときも、その研究到達目標の高さや研究領域の広さなどに気づかず、教えてもらえるといった程度の安易な受け止め方をして、もっと苦しむ羽目になってしまったというのが実態である。正直なところ、平成12年（2000）度からの『論集・アーカイブズの科学』の編集・執筆に組み込まれてしまった後で、もっと早く降りておくべきだったと、思慮の足らなかったことを悔やんでいる。

この苦しみの源は、急激な時代の変化についていけなくなった個人的な事情によるものであろう。史料館の研究活動の視野が、情報化社会の進展に対応して、現在から未来へ拡大してきており、目に見える紙資料を、「文書」→「記録」→「史料」という流れの中でとらえてきた者にとって、とまどうことの連続である。目に見えない「デジタル文書」や「デジタル記録」

という情報管理は、あまりにも苦手な対象であり、ましてや、実際の「デジタル史料」へのコントロールを考えなければならないという時代の到来は、不安にならざるをえない事態である。

続いて、山口県文書館も50周年を迎えることになる。半世紀の節目を意識して、旧来の殻を脱皮する必要があると思いつつ、若い世代に期待せざるをえない状態を実感する。特に、既存の文書管理制度に乗らないデジタル記録について、新しいシステムと施設を用意しなければならないと、史料館の研究活動に加わったあたりから、痛感し始めている。

今年50周年を迎えた史料館が、「記録史料の情報資源化と史料管理学の体系化に関する研究」を基礎として、『論集・アーカイブズの科学』の編集・公刊を進めていることは、20世紀の史料館・文書館界の理論的な到達点を示すだけでなく、21世紀への新しい理論構成を目指すものとして、今、胸突き八丁に差し掛かっているようである。

## 保存の理念から実際まで

東京芸術大学大学院 稲葉 政満

### 史料の材質劣化評価

科学研究補助金による史料館の「試験研究・歴史史料の材質劣化評価への化学発光の応用研究（1996～1998）」に参加した。文化財の材質分析や劣化程度の評価は非破壊法によることが理想である。史料が発する光子を数える化学発光法はその可能性を秘めた方法といえる。研究は予備的な検討に終わったが、江戸時代の100年以上にもわたって同質の紙試料を保有する史料館ならではの研究であり、他の研究機関では行いがたいものであった。私にとっては、史料の形態、紙質に関する知識を得る良い機会となった。

### 保存箱の研究

史料の周辺環境を少しでも改善する方法を検討する目的で、史料館と共同で1997年から1年間国文学研究資料館史料館の史料収蔵施設を実験場所として、保存箱の温湿度調節効果に関する実験を行った。その結果、箱内部の湿度変動を抑制するのには、箱の密閉度が重要であるという従来からの知見を確認した。一方、史料それ自身を含めた箱内部から発生する有害ガスを放出するためには、箱にはある程度の開放性があることが望まれる。このような開放性のある箱でも、調湿紙を箱裏に貼付するだけで湿度変動の抑制が可能であることを見いだした。実際の収蔵庫内でのデータであり、一般の方々へのインパクトが大きかった。

### 「保存と修復」研究部会

史料館の特定研究「記録資料の情報資源化と史料管理学の体系化に関する研究」の中の「保存と修復」研究部会に属して部会メンバーと史料館の館員などと研究を行ってきた。部会メンバーが少数である点を生かし、それぞれの専門に立脚した議論が十分に行える環境が与えられた。保存と修復に関して幅広く互いのコンセンサスを形成するのに役立った。

### 史料管理学講習会

史料管理学講習会での講義「保存科学」をさせていただいている。ここで文書館の現場の方々々と議論することによって触発されたテーマがある。

以上のように、資料保存の大きな枠組みから、個別の研究テーマまでの研究に携われたことにより私が得たものは計り知れないものがある。

## 史料館のおもいで

くらしき作陽大学食文化学部 馬淵 久夫

平成4年の暮れのことだったと記憶している。東京国立文化財研究所を定年退職して、津山にある作陽音楽大学・短期大学に奉職して間もない私に、一本の電話がかかってきた。森安彦先生からで、資料調査で津山に行くので会いたいとのこと。結局、津山郷土博物館で初めてお目にかかることになった。

お話しの内容は、史料館に史料管理研究室ができることになり、当面の措置として客員の枠がきた、ついてはそこに収まってくれ、ということであった。文化財保存の立場からいうと、扱う対象の大半は紙質文化財であり、私の専門とする青銅器からはだいぶ離れている。しかし、保存科学はまだ若い分野で人材が少ない。やむをえないだろうと、勝手な理屈でお言葉に甘えることにした。もう一つ、私は史料館のすぐ近くの豊町で生まれ、3歳のとき現在の蒲田に引っ越したと聞いており、これも神様のお引き合わせかと思ったこともある。

このような次第で始まった年間約50日の史料館勤務は、私にとっては有難い日々であった。教育中心の私学では得られない、静かに考える時間は貴重であった。森館長ほかのスタッフの皆さんにも親切にいただいた。勤務日には必ずお世話になった青木陸さん。『文書館学文献目録』に私の分野の『文化財科学文献目録』の関係項目を採録してくださった山田哲好さん。このお二人には忘れられない思い出がある。

史料館主催の研究集会に保存科学研究者の何人かを紹介したこと以外は、何の貢献もしなかったように思うが、私の方は全くの異分野体験でいくつか考えるきっかけを頂いて有益であった。一つは、史料館の先生方を「研究」に駆り立てる動機は何かということ。もう一つは、異分野間の共同研究は成り立つかという問題である。

科学史・科学哲学の村上陽一郎氏は、研究のタイプを好奇心駆動型と使命達成型に分類している。私の場合、青銅器の原料産地推定は前者であり、文化財の保存研究は後者であった。自分の性格からすると、文化財研究所保存科学部の主目的である後者だけでは満足できず、前者を織り混ぜていたのが事実であった。史料館の先生方は多分、一つの研究で二つの動機を満たしているのだろうという、羨望が混ざった想像をしていた。

異分野間の研究者の関係については、C.P.スノウの「二つの文化」がやはり問題だった。スノウの場合は、人文系と科学技術系が全く言葉の通じない二つの人種になっている1960年頃のイギリスの状況を批判し改革を提案して世界の注目を集めたわけだが、私の場合は、輸入文化である西洋自然科学にどっぷり漬かった自分と、方法論には若干欧米の影響はあるにしても、基本的には日本独自のものを研究される史料館の研究者の方々とは、スノウとは別の意味で言葉の通じない二つの文化だという感じが強かった。スノウの場合は3世紀遡れば同根の文化であるが、私の場合は日本文化と輸入文化の間の溝があると感じていた。

最近、ご多分に漏れず私の大学でもコンピュータ教育に力を入れるようになった。担当教員

の数もだんだんと多くなってきた。その教員たちと他の教員との間で、肝腎のところで話しが通じないというケースが目立ち始めている。スノウは「三つの文化」という講演をする必要があるかもしれない。

## 史料館の思い出

オハイオ州立大学歴史学部 フィリップ・C・ブラウン

初めて史料館を訪れたのは1977年のことでした。20年以上も前のことになりました。日本で暮らし始めたばかりの“日本初心者”の私を安澤秀一先生が館内を案内して下さいました。豊かな緑に囲まれ、ゆったりとした静かな環境はその当時も今も少しも変わりません。二度目は1985年でした。その時は、安藤正人さん、山田哲好さん、青木（広瀬）睦さんとお目にかかり、史料館の活動についてさらにいろいろと教えて頂きました。日本国内における史料の整理方法やその保存の状態を知るきっかけになりました。長い歴史を物語る豊かで膨大な量の古文書が現存する日本で、“アーキビスト”と呼ばれる専門家の仕事が比較的新しい分野であることも知り驚きました。それぞれの時代を語る価値ある史料が、スペースの問題でその行き場所を失い、処分されることもあるという日本が持つ事情と課題にも考えさせられました。まさしくスタートの時期にあって、フロンティアとしての安澤先生をはじめ史料館の皆さんのエネルギーな活動には感動しました。ちょうどその頃から、私は、日本に存在した土地制度「割地制度」のおもしろさを次の研究テーマに絞りこみたいと考えていました。安澤先生のアドバイスもあり、早速マイクロフィルムカメラを使って、史料館が所蔵する史料の撮影に入りました。主に新潟の県史・市町村史に関する撮影です。中でも、安藤さんが作成された目録「佐藤家文書」は、割地実施の内実を知る史料として、さらに私と史料館との付き合いを深めてくれるものになりました。

機会あるごとに史料館に寄らせて頂きましたが、1997年秋からの半年間は、COE外来客員研究員として史料館で研究できる機会に恵まれ本当に感謝致します。生の史料を手に取り、指で江戸中期の遺産に触れ検討を重ねるすばらしい経験でした。虫食いの個所やインク（墨）のバリエーションの意味を究明してみても、江戸時代を物理的に理解する楽しみを味わいました。いつでも自由に書庫に立ち入らせてもらい、そこにある史料と対面する味わいはアメリカにあってはとても実現できません。日本の歴史を研究する者として大変幸せな時間です。活字になった史料だけを使う西洋の日本研究者が圧倒的に多い中で、この流れを変えることは難しいでしょうが、今後、史料館で研究する機会を与えられる外来客員研究員にとり、この膨大な史料が、原点の“生の史料”にかかわっていくことへの大きな刺激となることを期待します。

外来研究員としての経験は史料館内に留まらず、沖縄県公文書館における「史料ワークショップ」の出席をはじめ、さまざまな共同研究発表会にその一員として出席する機会が与えられました。そこで、さらに史料館の活動を具体的に知ることになりました。アーキビストの専門化をすすめるためのその活動と努力は、私には大変印象深いものでした。市立・県立文書館などのスタッフとのトライニングは、史料に対する専門知識をさらに良質なものに高め、また、問題点を討論することはプロフェッショナルリズムを高める原動力となり大切だと思います。今

後も史料館の活動が、日本国内を中心に、広く海外の日本史研究や研究者達に影響を与え続けることを願います。すでに取り組んでおられる海外に流出した史料の把握やその研究も史料館のユニークさをアピールする役割のひとつでしょう。日本の古文書に関する独特な修理方法などを知って、そうした情報提供の場をどんどん広げて頂きたいとも感じました。

研究だけではなく、旧知の方々と、また新しく知り合った方々とのんびりとした時間を過ごしたことも大切な思い出です。戸越公園や戸越銀座を通り抜けての通勤、よく通った地酒を飲ませてくれるお店など、史料館を取り巻く環境は本当に心地よい時間でした。アメリカではほとんど経験できないふれあいの時でもありました。50周年おめでとうございます。皆様のますますのご活躍をお祈りいたします。

## 「在英日本史料の所在と現状に関する調査」研究に参加して

創価大学経済学部 神立 孝一

私は1995・96（平成7・8）年度の両年にわたって実施された「在英日本史料の所在と現状に関する調査」研究に、研究分担者として参加させていただいた。

本研究は、史料館にとって「全員で取り組む初めての国際学術調査」（安藤正人氏）だということであるが、こうした貴重な調査研究であることを知ったのは、1995年の12月に、森安彦先生、大口勇次郎先生、そして森本祥子さんと一緒にさせていただいた初の現地調査の折り、ロンドン・ヒースロー空港から市街地へ向かうバスのなかであったと記憶している。「史料館も変わったものですよ」と嬉しそうに語られた森先生の口調に、史料館の歴史的事業に参加させていただいているのだな、と意を新たにしたものである。

この研究に参加させていただくきっかけとなったのは、拙稿「英国の日本研究と日本史料」（『関東近世史研究』第35号、1993年10月）だったそうだと。この小論は、英国・マンチェスター大学の客員研究員として1年間英国に滞在し、「英国における日本史料」を調査した研究成果をまとめたものであった。これは1991年度に本務校である創価大学から長期在外研究の機会を頂き、マンチェスター大学・オックスフォード大学・ケンブリッジ大学そして大英図書館等に保存管理されている、近世文書を対象としたもので、そもそも近世文書がなぜそこにあるのか、そしてどのくらいの分量が保管されているのか、という単純な好奇心から発したものであった。だが、実際には調査にかかる時間、またそれをまとめる能力、といった点で不十分なまま帰国したというのが正直なところである。そうしたなかで、この研究への参加の要請を頂いたのは、私にとってまことに幸運であったといわざるを得ない。

さて、英国での実地調査では、2週間にわたり各地の大学図書館・文書館等を訪問し、目録を精読したうえで現物の文書にあたる、ということが主な作業であった。これは、史料所在情報データベースへの組み込みをはかるための、重要かつ基本的な作業ということができよう。さらに、こうした実際の作業だけではなく、例えばオックスフォード大学のボドリアン図書館の古書に対する修復作業の現場を拝見したり、PRO（パブリック・レコード・オフィス）の文書管理状況を視察させていただいたことは、文書の保存管理のあり方を考えるための貴重な経験であったと思う。これを契機として、それまでの記録管理に関する考え方が、反省とともに

大きく変わったことはたしかである。

英国の実地調査には、初年度だけではなく次年度も参加させていただいた。1995年12月の第1回目の調査では、個人的に第2の故郷とさえ感じている懐かしのマンチェスター大学での調査であり、翌96年の9月の調査では、在外研究のうちに実現できなかったニューカッスルとグラスゴー大学の文書群をみることができた。その喜びは言葉では言い表せないものであった。

こうした英国での実地調査では、学問的な成果はもちろんであるが、文書館の各先生方と親しく交歓できたことも、私の最大の財産になっている。何しろ、2週間にわたり3食をとともにしてさまざまなことを語り合うなどというチャンスは、日本にいる限りあり得ないではないか。各先生方の人生から、学問経歴、挙げ句の果てには、食べ物の好き嫌いに至るまで、お互いのことを細部にわたって知り合うことは、かつてない出来事であった。私にとっては、まことに至福の2年間であったといっていよい。果たしてどれだけ史料館の研究に寄与できたかは定かではないが、私が恩恵をこうむったということだけは、紛れもない事実であった。心からの感謝を申し上げたい。

## 史料館での研究に関わって

神奈川県立公文書館 石原 一則

私事から始めることをお許しいただきたい。20年前、私は新刊本や古本の匂いが漂う司書の世界から、神奈川県立図書館に並置されていた文化資料館に配属された。文化資料館には当時、行政資料課と郷土資料課の二つの課があり、私が配属されたのは行政資料課だった。配属されるまで、仕事の内容はほとんど知らなかった。

行政資料課の仕事は、役所が作った刊行物の収集と整理、保存期間が終わった公文書の選別と整理などが主なものだった。刊行物の整理は図書館の技術を基礎にしたものだったから、慣れるのに時間はかからなかった。しかし、公文書の方は困惑することが多かった。なぜあれではなくこれを残すのか、公文書の目録はなぜ館によってこんなに違うのか等々の疑問は、そのまま職場の先輩諸氏に向けられた。今思えば困惑したのは先輩諸氏の方かもしれない。先行する研究はないものかと図書館の書庫を歩き回った。駆け出しの司書には難問だったようだ。收穫といえるものがあったかどうかということさえ覚えていない。わからないことはわからないまま、ただ時間が過ぎた。

配属されて2年後、古書店から県の特高警察の記録を資料館が購入し、私が整理することになった。整理作業は試行錯誤を繰り返しながら、結局は表題を年代順に並べた目録を作って終わりとした。中途半端だという気持ちは残ったが、他の方法を思いつかなかった。その直後だったと思う。当時国立史料館に勤務されていた安澤秀一氏が、職員研修会の講師として来館されることがあった。正確な演題は思い出せないが、話はアーカイブズとアーキビストについてだった。その内容は私には新鮮に響いた。

——われわれのしていることは海外では司書の仕事と区別されてきちんと名前まである、仕事のやり方も違う、この間自分のやった資料整理はやっぱり中途半端だ。

講演後の私の感想である。それまでは、自分を広義の郷土資料の司書と規定しようとしていた



のだが、これを境に少しずつ軌道の修正が始まったように思う。30歳を少し過ぎたころのことである。

私が国立史料館の特定研究「記録史料の情報資源化と史料管理学の体系化に関する研究」に関わるようになったのは、それから10数年後の1995年1月に始まった準備研究会からである。はじめに国立史料館から打診があったとき、私は少し躊躇した。勤務先は新しく設置された県立公文書館になり、開館してまだ1年数ヶ月が過ぎたばかりだった。問題は山積していた。また、個人的にも特定研究が要求する課題にどれほど応じられるかわからない、という気持ちがあった。しかし、そのような躊躇とは別に国立史料館のような公的機関が、アーカイブズを正面に置いた共同研究を始めることへの期待は大きかった。この特定研究でやりとりされるであろうアーカイブズの知識も魅力だった。

特定研究では、第五部会の「文書館と専門職」研究部会に所属した。部会長などという役まで仰せ付かったが、面映いばかりである。部会の企画や進行は常に史料館の丑木幸男氏に倚りかかっていたようなものである。研究内容にしても自分の資を果せたかということ、はなはだ心許ない。パートナーの丑木氏、また研究部会の皆さんには迷惑をおかけしたのではないかと危惧している。

2000年3月の研究会を最後にこの特定研究は終了し部会長の役も解任となったが、研究報告の執筆と編集委員の仕事はこれからである。特定研究の成果が、日本のアーカイブズ・コミュニティの裾野を広げるものになることを願っている。

## 国立史料館時代と高山史料調査

東京大学経済学部図書館文書室 富善 一敏

筆者が国立史料館に日本学術振興会特別研究員として在籍したのは、平成6年度（1994）から同8年度（1996）までの3年間である。研究課題は、「近世・近代期の地域社会と村落行政－文書管理史の視点から－」、研究指導者は大学の先輩の安藤正人さんである。

史料館に在籍した最大の成果は、1995年6月に博士学位論文（『近世後期の地域社会と村政（東京大学日本史学研究室叢書4）』96年5月刊）を東京大学大学院人文社会研究科に提出したことである。大学院修了後は東京都北区史編纂調査会の非常勤職員として区史編纂事業に携わっていたが、年齢だけがいたずらに過ぎてゆくのに少なからぬ焦燥感を感じていた自分にとって、PDFに採用され、史料館で心おきなく研究に打ち込めることができたのはまさに天国であり、おそらく人生で二度とないであろう3年間であった。日中は閲覧室で史料を見て、夕方以降は第三史料整理室の一隅で論文を執筆した。土日も通うことが多かった。昼食時などには『史料館所蔵史料総覧』の原稿執筆で多忙な教官の皆様の部屋に押しかけて拙い自分の見解をふっかけ、有益な批判に接することができた。論文審査に合格し、95年10月に学位を授与された後、研究課題としていた近世・近代の村方文書管理史から、安藤さんと北海道立文書館の青山英幸さん、COE研究員の森本祥子さんを中心に運営されていた記録史料情報管理論研究会（現アーカイブズ・インフォメーション研究会）に所属し、領主文書も含んだ近世記録史料学に方向転換を試みている。その分岐点となったのが、以下に述べる高山の史料調査である。

おそらく渡辺浩一さんが書かれていると思うが、平成7年度～9年度文部省科学研究費補助金（基盤研究A）「幕藩領主文書と村方・町方文書群の発生・展開並びに伝存に関する史科学的研究」は、その当初から高山町会所・戸長役場文書（高山市郷土館所蔵）の史料調査が主であった。私は1994年12月の調査から、1998年1月の調査まで5回にわたり参加させていただいた。飛騨地域の近世文書に接するのは初めてであり、調査中に随時行われた高山陣屋他の見学、夕方の密度の高いミーティングとミニレポート、宿泊場所のパークシティ高山で深夜まで催されたコンパとあいまって、楽しい調査であった。

しかし本科研での調査に参加した以上、研究期間終了後の報告書及び論文集（高木俊輔・渡辺浩一編著『日本近世史科学研究－史料空間論への旅立ち－』北海道大学出版会、2000年）への執筆を怠るわけにはいかない。共同研究で明らかになった近世の高山町会所文書から近代期の戸長役場文書への変化のプロセスをふまえ、近世飛騨地域の特色をふまえた村方文書研究をいかにまとめるか悩んだ。町会所文書の調査も目処がつきかけた97年12月、高木先生が当初から注目しておられた、近世期に郡中会所であった押上屋の史料を見ているうちに、押上屋が郡中会所とは別の、村方文書の代筆を生業としていたことに気付いた。99年度に何度か個人的に行った補充調査の成果をもふまえまとめてみたのが、論文集に掲載した「文書作成請負業者と村社会－近世飛騨地域における筆工を事例として－」である。そこで問題意識とした、近世の文書主義を支えた存在についての検討に不十分さが残ることは否めないが、近世史及び記録史科学の深化にいささかなりとも寄与できたのではないかと考えている。